

〈音楽〉

創造的に表現する力を育む指導の工夫 ——詩の言葉の特徴を生かしたグループの創作活動を通して——

沖縄県立美里高等学校教諭 上 間 里 佐

I テーマ設定の理由

現代社会は、新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す「知識基盤社会」の時代であるといわれている。音楽においても、コンピュータやスマートフォン等の電子媒体の普及により、容易に様々なジャンルの曲や、民族音楽、伝統芸能等にも触れる機会が増えた。生徒を取り巻く音楽環境に変化が見られ、音楽への関わりがより身近なものとなってきた。インターネットや電子媒体を活用することで利便性が図られ、世界の情報が瞬時に得られる反面、人と人がふれあうことで身につけていたコミュニケーション能力の育成が難しくなり、人間関係の希薄化が問題として取り上げられるようになってきた。

平成20年1月の中央教育審議会答申において、各教科等の改善の基本方針が示されており、音楽科においては、「音楽のよさや楽しさを感じるとともに、思いや意図を持って表現したり味わって聞いたりする力を育成すること、音楽と生活とのかかわりに関心をもって、生涯にわたり音楽文化に親しむ態度をはぐくむこと」などを重視するものとされている。平成21年に公示された高等学校学習指導要領解説芸術音楽編（以下「解説芸術編」と略す）より、「A表現」（3）イにおいて「音素材の特徴を生かし、反復、変化、対照などの構成を工夫して、イメージをもって創造的に音楽をつくること」と示されており、音素材の特徴を生かしたり、構成原理を工夫したりして、表現したい音楽のイメージを膨らませながら、思いや意図をもって作品をつくることを重視した学習が求められている。生徒の自由なイメージを音に変えていく創作活動を通して、創意工夫を大切にしたい学習の充実を図りたい。

これまでの授業を振り返ると、生徒たちは器楽・歌唱に意欲的に取り組んでいる姿は見られる。将来、保育士や幼稚園教諭を希望する生徒も多く、特に技能習得のための練習や音程練習に気をつけて歌うなど、音楽の授業に対しては積極的に取り組んでいる。しかしながら、それら習得した技能を表現する場においては教師主導型となり、生徒の持つ発想やイメージの広がりを引き出すことができなかった。生徒も自分の意見に自信が持てず、知覚・感受した思いを伝えることに消極的であった。教師自身が意見交換の場の設定やそれぞれの考えを引き出すための発問が効果的でなかったことがあげられる。

このようなことから、本研究では生徒の思いや意図を表出できるよう、詩の言葉や、言葉の抑揚を音に表現させた創作活動を展開する。グループにとって価値のある音楽になるよう試行錯誤しながら作品を仕上げる。更に作品を発表し互いの作品の良さを認め合い、グループの創意工夫を生かし、自信を持って表現させることから、成就感、達成感を味わわせる授業の改善を図りたいと考え、本テーマを設定した。

〈研究仮説〉

創作活動において、詩の言葉や抑揚を生かし、試行錯誤しながら作品をつくり上げることや、グループの創意工夫を生かして表現することから創造的に表現する力が育まれるであろう。

II 研究内容

1 音楽における創造的学習について

(1) 音楽の創造的学習とは

創造的学習の創始者であるイギリスのJ. ペインター他著（1982）は『音楽の語るもの』において音楽における創造的学習について「児童・生徒を音楽を生み出す存在として認識し、生徒たちみずから音を探し、自由に創作する活動を音楽教育の中に位置づけたもの」と述べている。これまで教師が中心となって音楽の技能や知識を教えるということの多かった従来の音楽教育に対し、生徒自身が発見し、体験、そして音楽教育で自己表現することを重視したものとする。また、「創造的音楽には、選んだ素材を探索し、決定する自由があり、音と沈黙をリズム・旋律・和声のパターンに組織することも音楽の素材になりうる。」と主張している。このことから、生徒が音の世界を探

り、音そのものの価値に着目する視点を持つことが大切であり、生徒の発想を生かす学習内容であるといえる。また、坪能由紀子（2009）は『中等科音楽教育法』において、創造的音楽学習の特徴として、7つの特徴をあげている（表1）。本研究との関わりのある①②③⑦の点にポイントを絞り、研究を進めていく。①の「身の回りのすべての音を音楽の素材とする」とは、生徒一人一人の表現意図を表すための全ての音ととらえる。②の「反復性、応答性などの基本的な音楽構造をベースとすることが多い」は、音楽を形づくっている要素に関わることであり、創作においても支えとして進めていく。③の「五線譜の読譜や、楽器の演奏技術が乏しくても取り組むことができる」とは、読譜や記譜にとられない方法であり、自由に表現できるということと、とらえる。⑦の「一般的には一人ではなく、グループで音楽をつくることが多く、音楽を通じたコミュニケーションを図ることができる」については、グループで取り組むことで、音や言葉を媒介としたコミュニケーションを図ることから、個々の考えが広がり、深まることが期待できるととらえる。さらに、自分たちのグループの作品と他のグループの作品を比較、批評することで鑑賞とのつながりがでてくる。このことから、音楽における創造的学習は幅広い音楽世界へと嗜好を広げることができると思う。

表1 創造的音楽学習の特徴

- ① 身の回りのすべての音を音楽の素材とする。
- ② 反復性、応答性などの基本的な音楽構造をベースとすることが多い。
- ③ 五線譜の読譜や、楽器の演奏技術が乏しくても取り組むことができる。
- ④ 現代音楽、諸民族の音楽、日本の伝統音楽、ポピュラー音楽など、多様な音楽様式の理解へとつながる。
- ⑤ 鑑賞とのかかわりが深い。
- ⑥ 即興的な活動が含まれる場合が多い。
- ⑦ 一般的には一人ではなく、グループで音楽をつくることが多く、音楽を通じたコミュニケーションを図ることができる。

(2) 音楽科における創造的に表現する力とは

『解説芸術編』によると、音楽科の目標として「音楽の幅広い活動を通して、生涯にわたり音楽を愛好する心情を育てるとともに、感性を高め創造的な表現と鑑賞の能力を伸ばし～（略）」と示されている。創造的な表現する力を育成するためには、音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気などを感じることが、重要となってくる。創作において、音のつながり方を考え、どのようなつながりが良いのかを価値判断し、思いを込めて技能を高めながら表現することは、創造的な活動であり、思考・判断し表現する過程を大切にすることが創造的に表現する力を育成することにつながると考える。音楽体験を豊かにし、表現しようとする意欲を育てるとともに創造的な表現の能力を伸ばすことを大切にしたい。

2 創作について

創作とは、実際に音を組み合わせる音楽をつくり出すという活動である。音階・コード・音楽の構成・リズム・言葉のアクセントなどを基にメロディをつくる手法や、即興的に音を出し、組み合わせる方法と様々である。『解説芸術編』によると、事項（3）アは「音階を選んで旋律をつくり、その旋律に副次的な旋律や和音などを付けて、イメージをもって音楽をつくること」、イは、「音素材の特徴を生かし、反復、変化、対照などの構成を工夫して、イメージをもって音楽をつくること。」とあり、「即興的に音を出しながら音のつながり方を試すなど、音を音楽へと構成することを重視するとともに作品を記録する方法を工夫させるものとする」と示されている。本研究では、生徒が詩の言葉や抑揚を生かし、試行錯誤しながら音を音楽へ構成していく。さらに、創造的な活動へと促し、生徒の主体性や聴く力の育成、音楽様式の理解につながる重要な活動であると思う。

(1) 詩の形式について

詩の形式について、詩には現代に使われている言葉で書かれる口語詩、音数に一定の決まりがない自由詩、古い言葉や文語で書かれる文語詩などの形式がある。詩は作者の思考や心情が短い語句に凝縮されていることも魅力の一つである。中でも定型詩は七五調や五七調で、詩全体として音数を一定に保とうという詩人の意図が読み取れるものである。定型詩の構造と、音楽の楽曲構造に類似している点が多いことから、詩の言葉に直接音をのせ、音楽の構造や形式についても理解を深める学習へ展開することが可能であると考えた。今回は、定型詩の特徴である七五調や言葉の反復を音楽の構造に合致させ、創作の取り組みを進めていく。詩は韻文で一定の形式とリズムを持つことが多く、詩から受ける印象やイメージの広がりと言葉の抑揚をもたせ、楽曲に結びつける。詩の言

葉の特徴を生かし、詩を読む楽しさの実感をもたせることが大切である。詩の鑑賞や朗読から、言葉の関連や響き合いを詩の美学的な性質ととらえ、作者のメッセージや語句に着目させる。

(2) 音楽を形づくっている要素について

音楽を形づくっている要素とは、図1のように、リズム、音色、旋律、リズム、構成、形式、強弱、速度などであり、生徒が生涯出会う多様な音楽を理解するための重要な窓口である。音楽を形づくっている要素を指導することは、音や音楽を知覚し、そのよさや特質を感受し、思考・判断する力をはぐくむことにつながる。音楽全体を漠然ととらえるのではなく、音楽を形づくっている要素を視点として、具体的な音楽の構造に目を向けさせ、それらがどのような特質や雰囲気醸し出しているのかを生徒一人一人が感受する学習の積み重ねが、新たな表現の工夫へつながる。

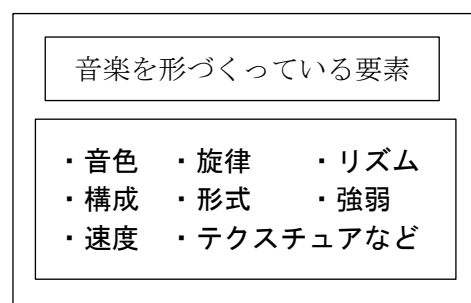


図1 音楽を形づくっている要素

(3) 音を音楽に構成するための方法

創作の手立ては、詩の言葉の特徴を生かし、言葉に表しそれらをグループでまとめ、音に乗せる手法で行う。言葉に表し、旋律をつくることでグループのイメージに合うよう、速度や強弱、形式などの要素をかかわらせながら、表現を工夫し、曲としてのまとまりをもたせる。生徒の実態として、旋律をつくることや表現をすることは、個人の経験の差があり、個々での活動では授業時間内において十分に工夫できないことが考えられる。友人と演奏を聴き合ったり、評価し合う時間を適切に設定し、他のグループの作品の良いところを互いに共有することを通して、それぞれのグループに生かすようにする。他のグループの作品を知することは、表現の幅を広げる上でも大変有効な手段であると考え。表現の幅を広げるとともに、旋律をつくる楽しさや喜びを味わわせることができると考える（図2）。

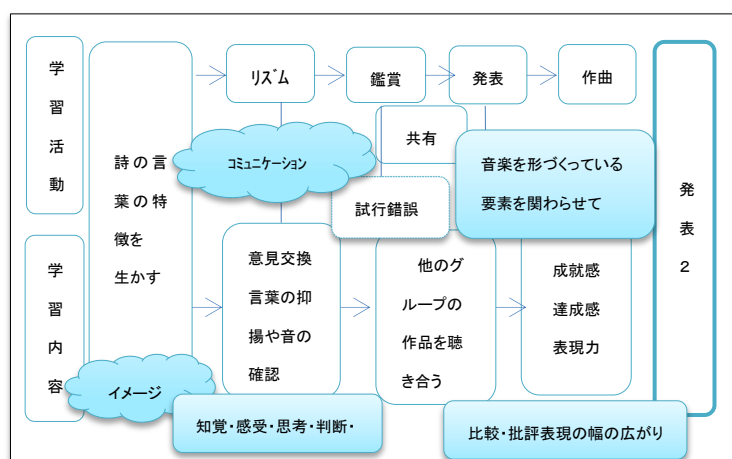


図2 音を音楽に構成する過程

(4) グループの学習形態の工夫について

島崎篤子（1993）は『音楽づくりで楽しもう！』で創作的な音楽活動のグループの学習形態について「何人かで音楽をつくっていくプロセスの中でお互いの音を聴き、知恵を出し合って音楽が出来上がっていく。おのずから協力体制ができてくる」と述べている。このことから、グループ学習の特徴である共通目的の達成を目指すとともに、グループ相互に影響を及ぼし合うことを期待する学習形態が創作活動には効果的であると考え。本研究では、グループ学習を中心に行う。取組内容に応じて学習の方向性が確認できる一斉学習や、互いの意見を伝え合い、自分の考えを容易に伝え合うことができるペア学習を適宜授業の中で設定し、学習を進めていく。そのことから創作が得意でない生徒も、面白さを発見し、積極的に取り組みが進められるのではないかと考える。また、今回は生徒個々に役割を与え、責任をもって曲づくりに取り組ませたい。

III 指導の実際

1 題材名「詩を味わい詩の言葉を生かした音楽をつくろう」

2 題材の目標

- (1) 詩を味わい詩の言葉を生かした音楽で表現することができる。
- (2) 音楽を形づくっている要素を活用しながら創作し、発表することができる。

3 創作の評価規準（評価の観点）

ア 音楽への関心・意欲・態度	イ 音楽表現の創意工夫	ウ 音楽表現の技能
音楽を形づくっている要素の働きの変化に関心をもち、イメージをもって表現したり、創作する学習に主体的に取り組もうとしている。	音楽を形づくっている要素を知覚・感受し、音楽の構成を考えながら表現したい音楽をイメージして音楽表現を工夫し、どのように音楽をつくるかについて表現意図をもっている。	音楽を形づくっている要素の働きを変化させて、創作をするために必要な技能を身に付け、創造的に表している。

4 指導と評価の計画（全8時間）

時	主な学習活動	留意点	主な評価の観点 (評価方法)
第一次	言葉の特徴に関心をもち、詩から受けた印象を伝え合う。		
	第1時 ・詩を鑑賞する。 ・詩の朗読を聴く。 ・詩から受けたイメージを言葉に表し、抑揚や雰囲気などを感じ取る。 ・感受した言葉をグループ内で確認し、まとめる。	・詩を味わい詩の言葉を言葉に表し、グループで意見交換を行う。 ・言葉から音へつなげることをイメージしながら表す言葉をグループで決める。 ・音の高低を図形で表し、確認後、階名(ドレミ)や五線譜で表せることを知る	関【ア】 (ワークシート) 創【イ】
	音のつながり方を考え、詩と旋律との関わりや構成を考えて創意工夫する。		
第二次	第3時 ・表現したいイメージから音をつくり、階名や五線譜、図形譜に表し、歌や楽器で音を確認する。	・既習曲の中で、表現の効果がわかりやすい要素を例示し、グループの旋律に生かすように伝える。	創【イ】 (行動観察)
	第4～6時 ・音楽を形づくっている要素と効果を確認しながら進める。 ・要素をもとに、前時でつくった旋律に表情をつける。よりよい作品になるように、他のグループの工夫をもとに改善したいところをチェックする。 ・作った旋律をグループごとに発表する。 ・中間発表を行う。	・他のグループの旋律を聴いて次時の自分たちのグループの創作に生かすようにする。 ・強弱、反復の例をあげ、参考にできるようにする。	関【ア】 (行動観察) 技【ウ】 演奏の聴取
	言葉の特徴や全体のまとまりを生かして、曲を仕上げる。		
第三次	第7時 ・形式について知り、作品のまとめ方のイメージをもつ。 ・楽器で音を出したり歌ったりして、音や旋律を確認しながら創作を進めるとともに、作品を記録する。	・曲の形式や、進んでいるグループの作品を紹介し、曲をまとめる事へのイメージをもたせる。 ・作曲した作品を記録するように確認する。	創【イ】 (ワークシート)
	第8時 ・作った作品を発表する。 ・感想を発表する。 ・ワークシートに記入する。	・発表の場を設定する。 ・他のグループの作品を鑑賞し、良さを発表しあう。 ・ワークシートに感想を記入する。	(行動観察) (ワークシート)

5 本時の指導

(1) 本時の目標

詩の言葉の特徴を生かした、旋律をつくろう。

(2) 授業仮説

創作活動において、詩の言葉に音をのせ、試行錯誤しながら作品をつくり上げることや、グループの創意工夫を生かして表現することから創造的な表現する力が育まれるであろう。

(3) 本時の展開

	○学習活動 ・ 学習内容	教師の動き ●評価方法【観点】				
3 校 時	○創作活動① ・前時の振り返りを行う。 ・前時の取り組みの様子をワークシートの記録状態や楽譜に記譜したプリントや、音を実際に聴いてみる。 ・確認プリントを読む。 1. 話し合いをする。 ・詩の言葉を感じ取り、どんな感じの曲にするかを考える(個人→グループ)。 ・長調か短調のどちらにするかを決める。 2. リズムを決める。 ・リズムを考える。詩の言葉にリズムをのせる。 ・拍子感を考え、リズムを決めていく。 3. メロディを考える。 ・詩の言葉にリズムを決めたら、そこに合うメロディを考える。 4. 楽譜に書く。 ・リズム、メロディをまとめ、楽譜に記譜していく。 6. 記録する。 ・ビデオカメラで作品を記録する。	・創作が進んでいるグループの作品を取り上げ、作業状況を説明する。 ・確認プリントを読み合わせする。 ・創作する箇所を限定することを説明する。グループの進度に応じて作業を進める。  2★グループで考えます★ (仮調) <table><tr><td>1◆ 過去にあった出来事→苦い経験</td></tr><tr><td>2◆ 何が始まる→予告</td></tr><tr><td>3◆ 何かの証人はササキ</td></tr><tr><td>4◆ 見せ所は空中ブランコ!</td></tr></table> グループの思い ・各グループの創作に生かしたい点を板書し、それらを自分たちのグループで参考になるかを考えるよう説明する。 ●ワークシート、行動観察 創【イ】 詩の言葉の特徴を生かし、旋律をつくろう	1◆ 過去にあった出来事→苦い経験	2◆ 何が始まる→予告	3◆ 何かの証人はササキ	4◆ 見せ所は空中ブランコ!
	1◆ 過去にあった出来事→苦い経験					
2◆ 何が始まる→予告						
3◆ 何かの証人はササキ						
4◆ 見せ所は空中ブランコ!						
・本時の説明をし、創作学習について確認する。 ・創作する箇所の確認をする。 ・取り組み状況シートにグループの進行状況をまとめ、発表する。 ・グループの発表を行う。 ・詩を朗読し、詩の言葉を再び味わう。 ・詩をもう一度鑑賞ながら、言葉のアクセントやリズム、構成(形式や反復)などを確認する。 ○創作活動② ・キーボード担当はコードで響きを聴かせ、リズムを全員で話し合いながら決める。	・取り組み状況シートを配布し、グループで取り組んでいることを書かせる。  どんな仕上がりになりたい? 1曲で変化の感じられる曲にしたいです。 ・詩を朗読させる。 ・詩の言葉を味わわせる。 ・リズムやメロディの例をいくつか示す。 ・構成、リズム等の変化を例示し、創作を促す。					

4 校 時	・コードに合わせ、リズム打ちをしながら小節内に入る拍数を確認する。 ・コードやリズムを合わせ、メロディを決める。 ・創作がまとまった1～2グループは発表する。 ・工夫した点を発表する。 ・感想を発表する。	 ● ワークシート・行動観察【ア、ウ】
ま と め	○本時の学習を振り返る ○次時の予告、片付け	・本時の学習の成果と課題について確認し、次時の活動を予告する。

(4) 本時の評価について

評価規準 (音楽表現の創意工夫)	(B) と判断する ポイント	(A) の状況例	指導の手立て
・知覚・感受しながら、言葉の特徴を生かし反復、変化、対照などの構成や全体のまとまりを工夫し、どのように音楽をつくるかについて思いや意図をもっている。	・言葉の特徴に沿った音高やリズム、構成等を工夫して旋律をつくるための思いや意図、工夫したことなどについて妥当な内容を書いている。	・言葉の特徴を生かした音高やリズム、構成等や全体のまとまりを工夫して旋律をつくるための思いや意図、工夫した事などを明確に書き、作品からもそれえらを読み取ることができる。	・思いや意図がうまく表現できない生徒には、階名シートを使うなど、個人指導する。

6 仮説の検証

研究の仮説に基づく検証授業において、詩を味わい詩の言葉の特徴を生かし、音を音楽に構成することや表現する力が育ったかについて検証を行う。検証は授業の実際や行動観察、ワークシート、前後の授業の際のアンケート調査等によって生徒の変容を見る。

(1) 詩からの印象を伝え合うことができたかの検証（第1時、第2時）

今回創作に使用する詩を中原中也の「サーカス」にした。七五調で構成され、オノマトペが出てくるとい特徴を創作に生かせると考え選定した。まず、自分なりに読み取り、自分の考えをもたせることが必要であると考え、黙読させ、作品の世界や詩の言葉に向き合い、想像したり、考えたりしながら読ませた。それぞれが感じた詩全体の印象や、詩から受ける言葉の印象について、ワークシートへ記入させた(図3)。詩を読み深めることで、作者や詩に対する理解がより詩の言葉を味わうことにつながったと考える。詩の言葉をより味わわせるために、詩を読む楽しさの実感をもたせることが大切であると考え、個々で行う朗読や声の印象を変えて朗読をすることで、様々な朗読のちがいを楽しみながら、変化をつけて行った。詩から受けるイメージについてワークシートへ記入を行っ

【ワークシートより】	
印象に残った言葉	ゆあーん ゆよん ゆやゆよん 茶色い戦争がありました 真っ暗 暗の暗 今夜此处でのひと盛り
気に入った言葉	ゆあーん ゆよん ゆやゆよん 茶色い戦争がありまして 見えないともないブランコだ

図3 詩から受ける言葉の印象

1◆印象に残った言葉はなんですか？
ゆあーん ゆよん ゆやゆよん
2◆気に入った言葉はなんですか？
暗の暗 茶色い戦争がありました

図4 ワークシート

た（図4）。生徒の詩に対するイメージは、「不思議な感じがする」「夢の中にいるような雰囲気」、「言葉の使い方が面白い」と、詩の言葉の響きに注目している生徒が多かった。それらを数名に発表させ、それぞれの見方・考え方を知ることができ、新たな視点を持つこともできた。このように詩を読み深め、創作ワークシートへの記入を行うことで、詩を吟味することにつながることもできた。自身の見方や考え方が広がることにもつながり、詩の背景や、詩に対する理解が、詩の言葉を味わったことにつながると推察され、詩を使ってイメージを喚起することは、創作の手立てとして非常に有効であると考えられる。

(2) 詩の言葉を生かした創作活動の検証（第3時、第4時）

検証授業第3時からグループでの作曲に取り組んだ。事前アンケートにおいて、「創作で困る（複数回答）」の問いに対し、38%の生徒が「つくりかたがわからない」と答えており、生徒が曲づくりの方法や手順について不安を感じている実態が見られた。そこで、曲づくりの具体的方法として、最初に身近に感じられることから、「CMに使われた曲」を聞かせ、メロディやリズムを例に挙げ、音楽を形づくっている要素を感受させた。次に、「和音の構成音」を学習し、段階的に創作を進める工夫を行った。

① 詩の言葉からのイメージを表出する活動

詩の言葉から生徒の印象に残った言葉や文章について話し合いを進めた。詩から感じとった、暗い、明るい、楽しい、悲しい、など、詩のイメージや印象、言葉の抑揚などに着目させ、生徒の思いを個々のワークシートへ記入させた（図5）。

生徒の印象に残った詩の言葉で最も多かったのは、「ゆあーん ゆよーん ゆやゆよん」と、「茶色い戦争がありました」という言葉だった。「ゆあーん ゆよーん ゆやゆよん」は、サーカスの詩の中で繰り返されるオノマトペであり、この詩では独特の響きや雰囲気を醸し出す特徴のある言葉である。詩の言葉から受ける情景を問うと、「ブランコが揺れている様子を書いたのか」と意見があった。

また、「茶色い戦争がありました」は、「戦争に色があるの?」「サーカスは楽しい場所のはずなのに、どうして戦争という言葉が出てくるのだろうか」など意見が出され、グループで考えさせた。

Aのグループを例にあげると、個々で記入したワークシートを基に再度、グループ全員で詩を朗読する姿が見られた。グループで声に出して読むことで、詩の言葉のつながりや、詩の印象に新鮮さを感じ、変化を見いだしていた。「戦争に色があるの?」という疑問に、「過去の苦い経験や出来事を表そうとしているから茶色い戦争と表現しているのでは」や「懐かしい感じがする」等、意見がまとまったことから、グループの活動において意見を出し合い、イメージを広げることにつながった。

② リズムをあてはめる活動

「詩の言葉に、戦争という言葉があるので、暗い内容に感じるが、サーカスという題名に合わせて明るい曲をつくってみたい」や、「最初は暗いけど、だんだん明るくなっていく曲をつくりたい」と生徒の中では徐々に曲づくりのイメージが広がっていく様子がグループの話し合いから見られた。詩の言葉の抑揚を感じ取り、言葉に直接リズムを付け足したり、言葉が繰り返される部分はリズムを反復させたり、音楽を形づくっている要素に関わらせた曲づくりが展開された（図6）。

Bのグループにおいては、最初は創作に対し、抵抗を感じたり、苦手と感じていた生徒が、七五調で構成された詩の特徴を生かしたり、

詩の言葉
1◆ 幾時代かが～疾風吹きました
2◆ 幾時代かが～ひと盛り

自分の思い
1◆ 過去の出来事、なつかしいかんじ } 暗め
2◆ 今日は何かがあるように思わす }

図5 思いや印象をまとめたワークシート

サーカス
中原中也『山羊の歌』より
1999ター、17、9-999ター
幾時代かがありまして
茶色い戦争がありました
997ター、9999ター、17-999ター
幾時代かがありまして
999ター、ター、ターター
冬は疾風吹きました

図6 詩の言葉にリズムを付ける

グループで相談しながらリズムを選び、音を合わせるなど、様々なアイディアを引き出せるようになり、徐々にではあるが、曲づくりに熱心に取り組む様子が見られるようになった。

伴奏の和音の構成音は教師が指定したが、徐々に自分たちで構成したりメロディを考えながら和音の進行を工夫するグループも見られるようになった。(写真2)。グループで相談しながら音を音楽に構成し、キーボードやピアノ、歌で演奏し旋律に生かしていけるよう何度も試した。自分たちの持つイメージを音にするために試行錯誤し、少しずつ音が明確になっていくことにつながった。



写真2 音を音楽へ構成

メロディが思い浮かばず、戸惑っているグループに対しては、教師がいくつかのパターンを示し、キーボードやピアノで確かめるよう指示した。グループのイメージが具体化され、音楽づくりの手がかりや手順について理解し、スムーズに音を音楽へと構成する活動が行えた。検証後のアンケートにおける「詩のイメージから創作に結びつけることができましたか」の質問に対し、9割の生徒が、「できた」と回答していることから、詩の言葉の特徴や抑揚を生かした創作活動は有効であったと考える。

(3) 表現する力が育まれたかの検証

詩から受けたイメージを曲づくりへつなげる段階で、どのような曲にしたいかワークシートに個々で記入させ、それを基にグループで相談しながら様々なアイディアを出し合った。その内容を発表し、内容を板書した。「詩の言葉に暗い言葉が多いので、最初は短調で開始して、途中で転調して長調の曲で終われるようにしたい」「聞いていて楽しくなるような曲にしたいからテンポを速めの曲にする」「印象に残る曲にしたい」と、表現を具体的に示したグループが多かった。そこで、音楽を形づくっている要素を示し、どのように表現につなげられるか具体的に例をあげながら説明した(図7)。

詩の言葉が繰り返される部分に反復を用いたメロディや、明るい印象を持たせるため軽快なリズムを組み合わせたり、暗く悲しい曲にするために演歌を意識しながらリズムを考えたり、グループの持つイメージに少しでも近づけていけるよう、工夫をしている様子が見られた。このことから、音楽を形づくっている要素について、その効果や印象を理解し、曲に結びつけ、曲として表現しようとしている生徒たちの姿から、表現する力が育まれたと考える(図8)。

(4) 学習形態の工夫に関する検証

本検証におけるグループの構成は音楽経験をみながら4～6名を一つのグループとし、それぞれに一つの役割を設け、役割が果たせるように配慮した。その結果、一人一人が責任をもって取り組む様子が見られた。

アンケート調査の生徒の感想の一部から(表2)、「友達と協力して曲を作ることができて楽しかった」「曲を作ることが最初は無理だと思っ

調性(イ短)調。

グループで取り組んでいる現在の状況

イ短調から、ハ長調への音のもっていき方を考えています。

転調して、明るい曲にしたい。テンポを変えて、ふんわり

つくる。

※テンポを落とす(リト)→転調調→テンポ戻す(ア・テンポ)

図7 グループ取り組みシート

サーカス

図8 曲が完成したグループの楽譜

表2 グループ学習の効果について生徒の感想

- ・みんなで協力し合ってがんばった
- ・友だちと相談しながらキーボードで音を探せたこと
- ・グループのみんなでメロディを考えられたこと
- ・自分たちで好きなように曲がつくれたこと
- ・みんなで思いついたことが音楽になっていくのがうれしかった

ていたけど、友達といろんなアイディアを出しながら曲ができていくことに楽しみを感じることができた」「難しかったけど、友達と一緒にだったから曲を完成させることができた」という感想も見られ、グループ学習で創作に取り組ませることで苦手意識や不安な気持ちを和らげ、創作活動に意欲的に取り組むことができたのではないかと考える。

互いに話し合い、創作することで、最終の目標である発表の取り組みも協力してやり遂げることができた。最終発表においては他のグループの演奏を鑑賞し、ワークシートへ感想や演奏に対するアドバイスを記入し伝え合うことができた（図9）。

また、グループ学習のなかで自分の意見を伝えることができますか」という質問に対し、事前では67%の生徒が「できる」と回答したが、事後の調査では「できる」と回答した生徒が77%で、10ポイントの上昇が見られることから、学習形態の工夫は効果的だったと考察する（図10）。

(5) アンケートから見る意識の変容

検証後のアンケートについては、リズムや音符に対し、わずかではあるが、抵抗がなくなったと回答する生徒が増えたことから、グループの持つイメージを明確にし、試行錯誤しながら表現につなげることができたことから、リズムや音符への理解が深まったと推察される。

創作の授業に関して、事前アンケートでは、

「曲づくりをしてみたいですか」という質問に対し、「してみたい」と回答した生徒は40%であったが、事後アンケートの「今後、機会があれば曲づくりをしてみたいですか」という質問に対し、「してみたい」と答えた生徒は77%で、37ポイントの上昇が見られた（図11）。

また、「創作の授業は楽しくできましたか」という質問に対し、ほぼ全員が「楽しくできた」と回答していることから、今回の検証において、曲の作り方を知り、音楽を作る楽しさや想像することの楽しさを伝えることができたと考える。

生徒の作品やアンケート結果等による意識の変容など、一連の検証結果から、言葉の特徴を生かし、詩の言葉の抑揚を生かした創作を行うことでイメージが広がり、和音を変化させることや転調などの創意工夫が見られるようになった。学習を通して振り返った生徒の「一つの詩を使い、自分たちでリズムやメロディ、速度を考えることで雰囲気も曲調もちがう曲になることを感じました。」「グループのみんなでアイディアを出し合って、考えが広がっていったので、曲づくりはとても楽しかった。」という感想からも見られるように、新しい視点で曲を捉え、楽しんで創作をすすめ、自己の思いや意図を表現できるようになった。

これらのことから、詩の言葉の特徴や抑揚を生かした創作の指導の工夫によって、音楽の創造的に表現する力が育まれたと考える。

3. 他のグループの演奏を聴いての感想やアドバイスを書きましょう。

①	途中に変化とこもがあった。
②	グループ3人で各パートを担当していて、いろいろな曲調があった感じが良かったです。
③	とってもリズムが良くて、おもしろい曲調だと思いました。
④	リズムが良くて、1人1人グループと違って不思議な雰囲気だった！
⑤	暗い感じの曲調だったので、おもしろかった。

図9 発表の鑑賞感想シート

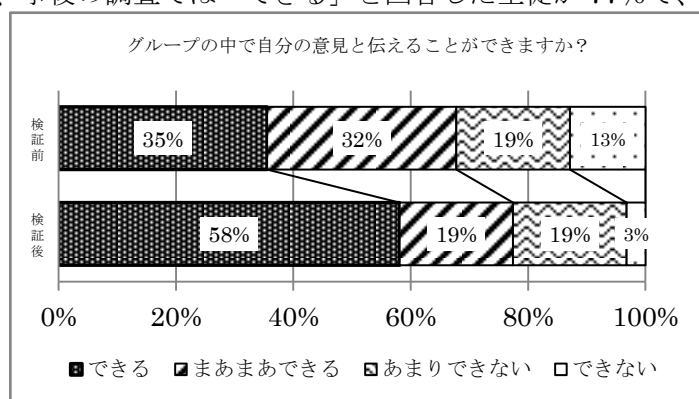


図10 グループで自分の意見が伝えられるか

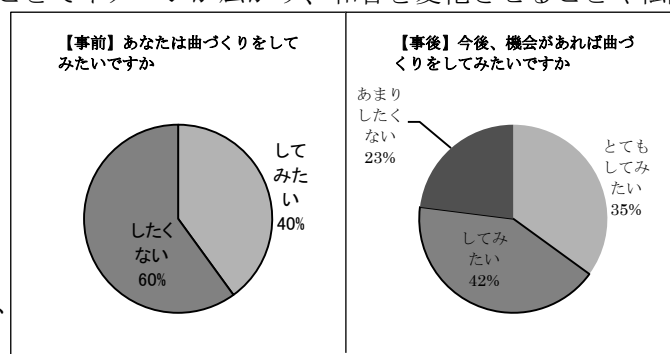


図11 曲づくりをしてみたいかのアンケート

IV 成果と課題

1 成果

- (1) 詩の言葉の特徴や言葉の抑揚を生かした創作ができた。
- (2) 詩の言葉の特徴を生かし、音楽の構造化が図られ、音楽の創造的に表現する力の育成につながった。
- (3) 曲のイメージをグループで話し合い、意見交換をすることから、より明確な表現へとつなげることができた。

2 課題

- (1) 音楽を形づくっている要素とイメージを関わるための指導の工夫。
- (2) 指導内容の精選と発問の工夫。
- (3) 創作における段階的指導の工夫。

〈参考文献〉

- 今村央子 2012 『音楽づくり』成功の授業プラン
中等科音楽教育研究会 2010 『中等科音楽教育法』 音楽之友社
文部科学省 2009 『高等学校学習指導要領解説 芸術編』教育出版
島崎篤子 2001 『音楽づくりで楽しもう！』 日本書籍
吉富功修 2001 『音楽科重要用語 300 の基礎知識』明治図書
河邊昭子 2005 『学力の質的向上をめざす音楽科授業の創造』明治図書
音楽科教育実践講座 1992 『ソナーレ SONARE』 音楽科教育実践講座刊行会
大越和孝 1994 『〈授業への挑戦 106〉感性の人 金子みすゞの詩の授業化』

〈参考URL〉

- 青空文庫『山羊のうた 中原中也』
http://www.aozora.gr.jp/cards/000026/files/894_28272.html